

母乳とクスリのはなし

「薬を飲んだ(飲む)から母乳はあげられない」「授乳中だから薬は出せないと医師に言われた」など薬局窓口で聞きますが、母乳育児を中断・中止することは母親としては大変なことです。そこで、母乳とクスリについて以下を参考にしてください。

1. ほとんどのお薬は、母乳中へ移行する。しかし、授乳中に禁忌(つまり、飲んではいけない)となるお薬は少ない。
2. 赤ちゃんにとって好ましくないお薬は、抗がん剤、放射性物質、抗精神病薬、抗けいれん薬など
ブロクリプチン、エストロゲン、エルゴタミンなどは母乳の分泌を減らす可能性があるので避ける。
3. なるべく母乳で、赤ちゃんへの影響の少ないお薬(赤ちゃんにも安全な薬)を、必要最小量、短期間で使用する。
4. 母乳中のお薬の濃度が高くなる時間を避けて授乳する。授乳直後や長時間寝る前に飲む。
5. お母さんがお薬を飲んでいる間は、赤ちゃんの様子を観察し、何か変わったことがあれば受診する。

ほとんどのお薬は母乳中へ移行しますが、実際に赤ちゃんに摂取される量は母親の服用量の1%以下とされています。赤ちゃんに影響が出てくるのは、20%以上移行したときとされているので、指示量を服用する限りは心配する必要がないと思われます。

授乳中は、抗がん剤や放射性物質は飲んではいけません。抗精神病薬や抗けいれん薬は、赤ちゃんに異常に眠くなったり、ミルクを飲みたがらない可能性があります。一部の解熱鎮痛剤を長期服用すると、赤ちゃんにお薬が蓄積する可能性があります。カフェインの反復服用により赤ちゃんが不眠となることもあるので、避けるほうが良いと思われます。喘息のお薬テオフィリンは、治療量では問題ないと思われますが、神経過敏、不眠の症状には注意が必要です。偏頭痛のお薬エルゴタミンなどは母乳の分泌を減らす可能性があるので避けます。

解熱鎮痛剤のアセトアミノフェン、抗生物質のペニシリン、アミノシリン、イソキサリドなどは安全とされています。(乳腺炎の場合など、抗生物質はしっかり服用すること)しかし、必要な薬を必要最小量、短期間で使用し、授乳時間と服用時間を工夫しましょう。また外用薬や吸入薬などがあれば飲み薬よりもより安全です。

そして、お母さんがお薬を飲む間は、医師や薬剤師に赤ちゃんの状態に注意すべき症状を聞いておき、変わったことがあれば受診するようにしてください。

授乳を中断することは、お母さんと赤ちゃんにとって精神的にも肉体的にも負担です。不適切な情報による誤った判断で断乳しないようにしましょう。補足ですが、アルコールも授乳直後、赤ちゃんが寝たときに飲まれるほうが良いかと思えます。また、喫煙はお薦めしません。

薬の主作用と副作用

主作用は薬の本来の目的とする作用のことです。しかし体の中に入った薬は、体のあちこちに働きかけて効果を発揮するため、目的以外にも作用がでることがあります。このように目的ではない、**期待しなかった作用のことを副作用**といいます。

総合感冒薬を例にお話します。熱や痛みを和らげる、炎症を抑える、鼻水を止める作用があります。鼻水を止めるのが主作用である成分は、ある人には眠気、便秘、口の渇きなどをもたらすことがあります。このように薬を適切に使用したのに、期待していない悪い症状がでた場合が副作用です。また人体には熱、痛み、炎症に関係する「プロスタグランジン」という物質があります。かぜをひいたりすると、この物質が過剰に分泌されて発熱などの症状がでます。しかしこの物質は胃の正常な機能を保つのに重要な働きをしています。総合感冒薬の中の解熱鎮痛剤はこの「プロスタグランジン」という物質の産生を抑制する働きをするので、胃障害が起こることがあります。「鎮痛剤を服用すると胃が痛くなる」とよく言われますが、このような副作用がでることがあります。

上記のものは、薬の作用が効果を期待した以外のところででたものです。これとは別にアレルギーに起因する副作用もあります。薬疹、ショックなどがあります。症状も薬疹など直ちに急激に発症するものや、長期に服用する中で起きるものがあります。自覚症状がない場合もあるので、定期的に血液検査でチェックしていきます。薬によっては、検査が義務づけられているものもあり「この薬はしばらく服用しているから」「この薬は二度目だから」これらは副作用でない理由にはなりません。アレルギー性の副作用で特に気を付けることは「**再服用で重篤な副作用がでることがある**」ことです。医療側と患者側とも、十分注意する必要があります。

副作用には、軽いものから重篤なものまであります。解熱鎮痛剤で注意すべき重篤な副作用では「**スティーブンス・ジョンソン症候群**」(皮膚粘膜眼症候群)があります。まれな副作用ですが、重症な皮膚障害の一種です。初期の自覚症状に「高熱を伴って、発疹・発赤・火傷様の水ぶくれなどの激しい症状が、全身の口や目の粘膜にあらわれる」ので、このような症状があらわれたときには、薬の服用を止め、直ちに皮膚科専門医のいる設備が整った医療機関の診療を受ける必要があります。早いものでは3日以内、多くは15～21日程度で発症すると言われています。

もし副作用のような症状がでたら...

決して我慢しないで医師や薬剤師に相談してください。治療上適切でなければ、薬の変更や中止する場合があります。症状を詳しく聞いて、副作用かどうか判断し、必要あれば副作用確定のための検査をすることもあります。

すべての人に安全な薬はありません

しかし副作用を必要以上に恐れて、薬の服用を減らしたりすると効果的な治療にはなりません。よく「この薬を長く飲むと呆けるから・・・」と聞きますが、決してそんなことはありません。医師の指示を守り重大な副作用を回避し効果的な薬物治療することが大切です。不安な事があれば、どんな事でも私たちに相談してください！

副作用回避に！

薬局では、お薬手帳を作成しています。同じ副作用にかからない為にも、記録しておく事をおすすめします！（保険のできるサービスですのでご利用ください！）